

爆破してしまい、それ以降、虎林線は不通となり、集合に遅れた者の悲惨な山中彷徨の序曲となった。

私どもの部隊は頭初から汽車輸送を避け、勃利を経由、牡丹江を目ざしたが、途中ソ連の空襲、土人の蜂起を避けつつ、約一か月後、綏濱線の亜布洛尼の部落でソ連の武装解除を受け、横道河子の捕虜収容所に收容された。横道河子の収容所に約一か月、「日本軍がウラジオに逆上陸した、ウラジオ經由で帰国する」などのデマにまどわされつつ、栄養不良で歩行困難な日々を送った。

その頃民間人はハルビンに返すとの情報を得、民間人の集団にまぎれこむことに成功、これがシベリア行きとの訣別だった。

幸い家族はハルビンの軍関係者が收容してくれたので雨露はしのげたが、当初難民扱いだったので、約半年ぐらいは食糧の配給はあった。後半になると、とどこおりがち、自前のクローリーのまねごと、立売り、富有な漢人の日雇い等々、約一年ハルビンに潜伏していた。

ようやく、日本人送還の協定が中共と国府軍との間に取りかわされ、家族五人、骨と皮になって、コロ島から

帰還したのが二十一年一月九日未だった。

実家にはすでに兄夫婦が疎開していた。苦勞に苦勞を重ね、ようやく定年を迎え、苦勞をかけた妻に少しばかり罪ほろぼしと思っていたが、無情にガンで私をおいて先に逝ってしまった。

## 命がけの石炭拾い

群馬県 笹沢 千万子

二十年春、私は南満の日本人の多い大石橋街で在満国民学校の教員、夫はソ満国境黒河の金融合作社に単身赴任、五月の節句に私を迎えにきて召集。東安の部隊へ五月、六月、七月と何回もの召集で街に男性は少なくなり、先生方もつきつぎと召され、校庭は防空壕と野菜畑になりB29が飛んでくるようになり、不安はつのるが、報道を信じ、必死に生きていました。

八月九日早朝、戦勝祈願に行くとき、校門前がにぎやかなので入ってみると、見すばらしい姿の老人と婦女

子、あき缶をぶらさげてうつろな表情で右往左往、荒縄でおんぶ、赤ちゃんの足は皮が剥げ、血が出て泣いている。腹がへったと母を困らせる子、この集団は、ソ連に攻められ、逃げてきた開拓団の人びとでした。

ここで初めてソ連の参戦を知り五族協和、日本軍、国境守備の夫のことが浮かぶ。新聞もとだえた。

当時はこういった、口づたえで知る。街は中国人の往来でにぎやかになる。在庫米の特別配給がある。日僑連絡所ができる。召集兵がちらほら帰ってきた話を耳にする。宮口の街は、日本人一人残さず撤収の命令。大石橋へも歩いてたくさん入ってきた。異国なので、感情も言葉も慎まねばならない。

二十七早朝、産気づく。満鉄病院へ電話する。昨夜ソ連に占領されたので駄目とのことであった。

お産について介ぞえを頼んだ従姉妹は、汽車が動かないので新京からこれないと連絡があり、隣の家に走ったが、鍵がかかかっていて、居留守をつかってあけてくれない。痛い苦しい困った、動けない、その時思いがけず、福井県の女性が見え「待っていないさい」と言うより早く

外に出て、街の産婆を引っ張ってきてくれた。

地獄に仏とはこのこと、嬉しくてありがたくて、涙がとまらない。横にねかされたのは女の子、柱時計が十時を打つ。夫が帰ってくることを祈り、飲まず食わずで横になっている。

夜中雷雨、ミルクも牛乳もない。食べなければ翌朝起きて粥を作り、味噌を添えて食べている所へ、夫の知人夫婦が心配だからきてみたを訪れ、昨夜の雷雨中、街はソ連人でたいへんだったよし。女性は外へ逃げ、有刺鉄線で身体中傷だらけだったと話す。

八月の二人の給料は入らず、預金は払い戻しできなかった。そんなときボーイさんが出産祝いに二十円くれたので助かった。人情に国境はないとしみじみ思う。外はソ連人の靴音ばかり。教え子の両親が心配してきてくれ、窓の外へ板やブリキカンを張ってくれた。

部屋は真昼でも真っ暗、水道も電灯もこわされ、夜はぼろ布に食用油をしみこませ、あかりとし、朝になると、天井からすすがぶら下がり、わが子も私も鼻穴が真っ黒、手さぐりで乳を飲ませるので、乳がわが子の耳やノ

ドに流れてただれてしまう。

飲料水は五百メートルぐらい離れた駅の井戸に行く。

手桶はなく、バケツ一個で家に着くまで半分になっ  
てしまふ。

洗濯はマンホールのうわづみを使う。わが子も男便所  
を使う。男性は便役に出ているようであつた。

ソ連人が見えなくなり、八路军が入ってくると、日本  
人は道路に店を出し、家財や衣類を売る。

子どもは石けん、煙草等を入れた箱を前にぶら下げて  
売り歩く。持ちがねも少なくなつたんだらう。寒空に衣  
類を手放す、私もその一人、南満とはいえ零下二十度  
にもなる。

冬に備えて石炭がない。始めは学校の机、腰掛けを  
拾ってきて燃やしたが、すぐにもえつくし、火持ちしな  
い。

そこで一キロ離れた山すその工場の貯炭場へ風呂敷を  
持って拾いにいく。背中と両手に持って手早く逃げる。

ある日は銃剣を持った見張り兵がいて、銃殺されそ  
うになり、恐ろしい。でもようすを見ながら行かざるを得

ない。命がけの石炭ひろいであつた。

またある夜中に玄関の戸をけとばす音。名前を呼ぶ日  
本語、恐ろしくて足が動かない。おそるおそる開けた途  
端、ノド元に銃剣、ソ連兵が七人、部屋をひっかきまわ  
して天井から床下まで探す。子どもを抱いてつねつては  
泣かせ、ふるえている私に『クニニャンテンホウ』の言  
葉を残して子どもの頭を撫でて去っていく。何をもって  
いったか恐ろしくて見ていなかった。

恐ろしいこと、泣いたこと、困つたこといっぱいあつ  
たが、ともかく母と子、ぶじ越冬でき、柳の芽が緑に見  
え始めた頃、引揚げの話がでる。荷物をまとめ始める。  
はたで、子は紐をいじって遊んでいる。紐より他に玩具  
はない。

七月始めの炎天下、行方のわからない夫を残し、無蓋  
車にのる。一人の面積は座っただけ。膝に子どもを置き、  
身動きできない。

汗を拭くと隣の人におぶつ。列車は走ってはとま  
り、走ってはとまり、大平原を走りコロ島の収容所へ。  
車中でも、収容所でも、同行の幾人かが死亡した。

LST (米国の貨物船) で母国へ。この船中で子どもはハイハイを始める。一か月かかって帰国。夫はシベリア抑留中死亡。栄養不良で一年たっても立てなかつたその子どもが、今は二児の母。長かつた四十五年の歲月、夢中で生きてきた今、ここで一息入れて、私きり知らないあの日の夫の映像を一日も長く思い、老いの春秋を元気に楽しくボランティアに入ったり、高齢者学級へ行ったりして過ごしています。

## 強盗にあつたチチハル

東京都 水谷 寧子

私達家族は、北滿のチチハルに住んでおりましたときに、敗戦を迎えました。

十一歳を頭に、末の弟はまだ乳呑み児でした。

満州国政府の要職を歴任した父は、同年の十月に、ソ連軍將校数人の、丸一日にわたる家宅捜査の末、馬車に乗せられて、肌寒い夕暮れの道を連行されました。まだ

子どもだった私にも、この連行は十中八・九、父とこの世の別れになるのではないかと、うすうす感じていました。

その後の、残された家族の生活は、筆舌にはつくせないほどの惨めなつらいものでした。が、その当時の私という子どもの目に映り、肌で感じたものの一端を、感情移入を避けて記憶をたどってみたいと思います。

母の話によると、あの八月十五日を期して、統治は無政府状態となり、物価は十倍にはね上がったとのことです。ゆえに、あの何も頼るものがない中で、ただひたすら、自分達の生活の糧を得ることに奔走した一年でした。

まだ若かつた母の外出は危険だったのでしよう、十一歳の私と十歳の弟が一家の生計を立てなければなりませんでした。

煙草売り、パン売り、ふとん屋の手伝い、着物売り、そしてある時は夜、人形を作り、昼売り歩く、ということもやりました。いくらにもなりませんでしたが、それでも一家八人の糊口をしのぐ足しになったものでした。